

徳島の木造住宅6題

徳島の木造住宅事情

徳島は有数の林産県です。県は木造振興に力を注ぎました。昭和59年には建設、設計、林業等関係機関を含めた「木造住宅推進協議会」を発足させ、地域適合型住宅「とくしまの家・120」の開発やモデル住宅の建設、消費者に対するバス見学会、小・中学生を対象に「わたしと木造住宅」の絵画・作文コンクール、児童向け絵本『ほくのゆめのふしきの木』発刊など、幅広い活動を行ってきました。

また木造住宅優遇政策として、県林政課には昭和59年度から「県産材使用の木造住宅に対する建設資金貸付制度」、県住宅課には昭和62年度から「地域優良木造住宅助成制度」を設けています。そして毎年、表一のように利用されてきました。

表一 木造住宅優遇制度の利用件数 (単位:件)

年 度	昭59 ~61	昭62	昭63	平元	平2
林政課・貸付制度	418	121	67	74	96
住宅課・助成制度	—	6	63	59	57

(徳島県調べ)

このような背景には、本県の木造住宅の低迷が一つに上げられます。徳島県住宅宅地問題調査会報告書によると、持家における木造住宅率の全国順位は表二のように予想以上の悪い結果となっています。昭和58年度には69.2%で沖縄(1.0%)に次いで低く、立地条件から沖縄は論外だとすれば実質上の最下位です。その後徐々に順位を上げてきたものの、平成元年度は72.6%で39位に低迷しています。しかし、この低迷の原因については、台風の襲来に対しての鉄筋コンクリート造の信頼性などが考えられるが、明確な理由は分からぬとしています。ただ木造住宅率が高ければ良いと言うことではありません。当然、そこには住空間の質の問題が関わってきます。県は林産県の立地を生かした良質で豊かな木造住空間の普及を強く訴えているわけです。

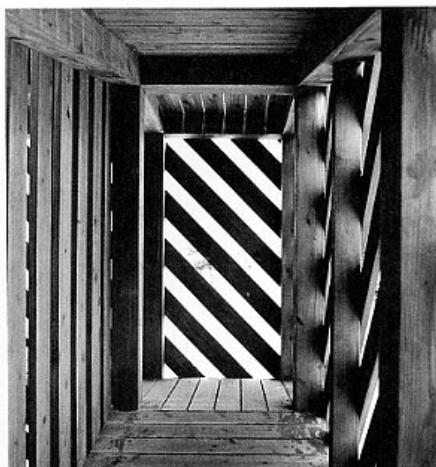
愛される新木造空間の創造を……

6月7日今日一冊の本が届きました。林野庁の補助事業で徳島県が県木造住宅推進協議会(会長:速水剛)に委託して作った「木造建築」です。県内の代表的な木造建築23点を写真と図面で紹介しています。美しい装丁は県産材の需要拡大、木造建築の普及推進に一役担いそうな予感を漂わせています。巻末には「徳島の

コミュニティの中で生きる

—楽しく創りたい—

富田 真二



▲ラウンドハウス内部 (写真=西田茂雄)

木造事情を語る」と題して、速水会長、林業家和田善行氏、建築家野口政司氏、県土木部住宅課長座間愛知氏の4人による座談会の内容が収録されています。その中で印象に残った話は以下のようなものでした。

- (1) 木造振興は公共団体主導型であり、大規模建築が民間まで波及しない。
- (2) あと10年で主伐期に入り、今の生産量の倍以上の木材が産出される。
- (3)かつての川上から川下への文化は途絶え、

表二 持家における木造住宅率の全国順位

(単位: %)

年 度	昭58	昭59	昭60	昭61	昭62	昭63	平元
高 い 順	1位 秋田(97.1)	秋田(96.8)	秋田(96.7)	秋田(96.5)	秋田(96.4)	秋田(96.2)	秋田(95.6)
	2 青森(96.0)	岩手(96.1)	岩手(96.3)	岩手(96.0)	岩手(95.7)	岩手(95.7)	岩手(95.2)
	3 山形(94.8)	青森(95.3)	青森(95.0)	青森(94.8)	青森(95.1)	青森(95.4)	青森(95.1)
	4 岩手(94.4)	山形(95.1)	山形(95.0)	山形(94.4)	北海道(94.3)	北海道(94.3)	山形(94.9)
	5 新潟(93.7)	新潟(93.9)	新潟(93.8)	北海道(93.6)	新潟(93.8)	新潟(93.6)	北海道(94.4)
低 い 順	1位 沖縄(1.0)	沖縄(1.3)	沖縄(1.3)	沖縄(1.6)	沖縄(2.0)	沖縄(2.4)	沖縄(2.8)
	2 徳島(69.2)	愛知(69.2)	東京(66.4)	東京(64.4)	東京(60.7)	東京(58.6)	東京(59.5)
	3 愛知(69.2)	東京(69.4)	大阪(70.0)	大阪(67.5)	大阪(66.0)	大阪(62.9)	大阪(60.5)
	4 東京(69.7)	徳島(69.5)	徳島(70.3)	愛知(69.0)	愛知(68.5)	愛知(67.2)	愛知(67.8)
	5 和歌山(70.3)	大阪(71.1)	愛知(70.4)	徳島(71.4)	和歌山(71.5)	高知(69.9)	山口(69.2)
参考 (四国)	徳島 46位(69.2)	44位(69.5)	44位(70.3)	43位(71.4)	41位(73.1)	40位(71.7)	39位(72.6)
	高知 30位(79.4)	29位(79.4)	36位(77.3)	30位(78.6)	35位(75.4)	43位(69.9)	37位(73.5)
	香川 32位(77.5)	33位(77.6)	27位(81.0)	31位(78.3)	31位(77.3)	31位(77.1)	30位(77.2)
	愛媛 39位(74.6)	34位(77.2)	34位(77.5)	34位(77.6)	27位(79.2)	30位(77.5)	29位(77.9)

(木造住宅建設の新しい展開、徳島県住宅宅地問題調査会)

生産者から消費者への情報が伝わらない。

(4) 良質な乾燥材の入手が難しい。

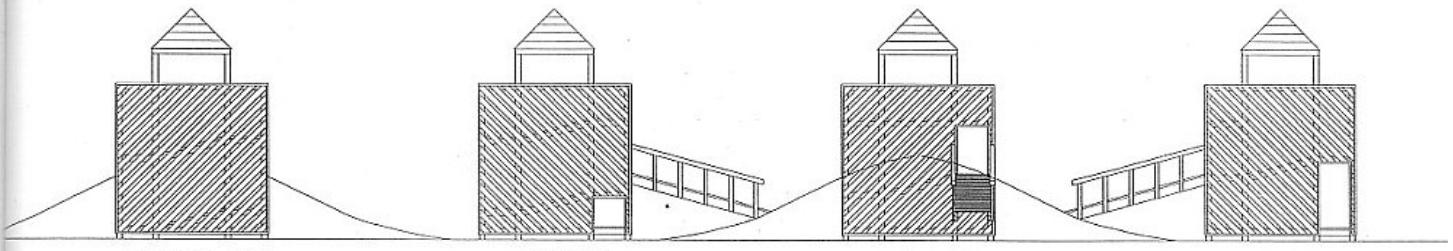
(5) 気候風土に恵まれた徳島では昔から木を大きく育てる林業型であり、無垢材を使った大規模建築が徳島らしさの一つになるのでは。

(6) 木の新しい魅力を引き出す木造空間の創造を。

(7) やはり、地球に優しい木造住宅。

この中で林業家の和田さんから多くの情報が発信されています。そして、その多くは僕たち設計者に向けられています。彼の一貫した取り組みは、『住宅建築』1991年6月号の座談会の中からも感じ取れます。生産者側からの貴重な情報として受け止めたいと思います。そして、設計者側からは野口さんが(6)の新しい木造空間の創造を強く訴えています。

木材生産者と設計者、この両者の結び付きは木造による良質で豊かな住空間の普及に不可欠なものだと考えます。しかし、現実にはうまく噛み合っていない場合が多いのです。それに設計者側により多くの問題が含まれています。「林業に携わる人々が長年手塙にかけて育ててきた木を本当に理解しているのだろうか?」と言葉当り前のことについてが起因していきます。机上での知識に氾濫する情報が拍車をかけて、木への知識は満たされます。さもみずからが山奥深く駆け行って来たかのように、疑似体験の中から新しい木造空間を模索します。一人ごとのように話してきましたが、現に僕自身がうだうだと思います。設計者の考え方を押し付ける



△南西立面図 1/125

△南東立面図

△北東立面図

△北西立面図

前に、まず生産者の考えを聞き、身体から理解することから始まるものだと思うのです。『住宅建築』1991年6月号のMs 建築設計事務所の三澤さんの一連の家づくりはそのことを実践し、それも施工者、建主をも含めたネットワークで豊かな住空間へと発展させています。

ただ便利なだけの薄っぺらい時代に、いま多くの人が古いものや自然にそのよりどころを求めています。そして日本の「木の文化」の歴史は、私たちに木の温もり、無垢の質感など絶対的な価値観を教えてきました。民家型やその発展型は無条件で心地よい安らぎを与えてくれます。しかし今の時代、そればかりを求めては逆に木の文化を途絶えさせてしまう危険性があることも事実です。木へのノスタルジーを捨て去ることができたとき、本当の意味での新しい木造空間の創造が待っているのかもしれません。いまデザイン偏重の中で設計者たちのおごりが弊害となって、新しいデザインへの理解はますます遠のき狭い世界へと入っています。「愛される住空間の創造」のために、建築に携わる多くの心ある人たちの考えをいま一步下がって聞くことが、僕たち設計者にとって最も必要なことのよう気がしてなりません。

小さな杉の木のおうちから……

幼稚園でPTAの副会長、会長として2年間お付き合いしていた終りのころ、ふとしたことから、園児たちのおうちを設計することになりました。修了児の父兄が毎年、園に希望を聞いて寄贈するものを決めていたのですが、その年の園の返事は古くなったプレイハウスをとのことです。そして設計は会長さんにとの嬉しい?ご指名でした。ゆとりのない時期、短期間ではとてもできそうもなかったので一度はお断りしたのですが、先生方の熱望に打たれ引き受ける

結果になりました。

最初に浮かんだのが「遊具のような建築」と「三角帽子の赤い屋根」のことでした。子供たちの歌う「♪……三角帽子の赤い屋根／川内南幼稚園」の園歌を何度も耳にしていたので、今回それが復活できればと思いました。立体迷路と三角屋根を組み合わせたおうち、そんな形で設計が進みました。それからしばらく経って、園長先生が申し訳なさそうな顔で話されたことは「壁で囲われた迷路プランは管理上、安全上好ましくない。また風雨をしのぐ屋根や壁のあるものは建築物扱いになるので寄贈対象にならない」という教育委員会からの返答でした。ちょうどそのころ、「高島の住まい」の工事が進んでいました。今回取り上げて戴いたこの住まいは、家の内外をグルグル回れる循環構造をテーマにしていました。教育委員会からの返答はこの2つのおうちを再度考え直す機会を与えてくれたことになりました。何度も打ち合せの末、当初からこだわり続けた三角屋根は一回り小さくなつて中央吹抜け部に架かり、閉ざされていた壁は目透かしの板壁に、迷路的空間は螺旋スロープになって認められ、「高島の住まい」と同じコンセプトの「循環する家」に生まれ変りました。そして、高島の住まいには奥さんの提案で逆にスベリ棒が加わりました。

園児のおうちは園児たちの家族の手でとの思いから、工事は江戸君のおじいさんの工務店に引き受けいただき、最後のペンキ塗りは昨年9

月2日の日曜日にお父さんたちにお願いしました。春休みに完成予定の「小さな杉の木のおうち」は9月3日やっと子供たちの手に渡りました。

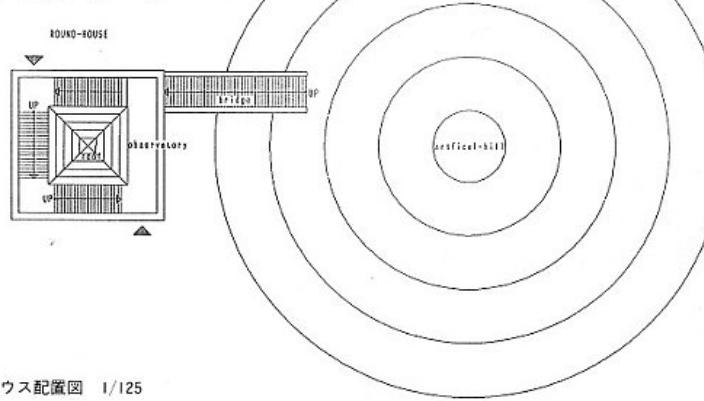
名前は和製英語ですが、呼びやすい「ラウンドハウス」になりました。子供たちは想像以上にわんぱくです。当初、3年に1度のペンキ塗りと部分補修で15~20年は持たせたいとの思いも崩れてしまいそうなパワーです。第2、第3のラウンドハウスへの展開はおろか、1棟を維持するのが精一杯の状況です。

しばらく経ってから、まち研(阿波のまちなみ研究会)仲間の林茂樹さんから、徳島県建築士会創立40周年記念事業の一環として、支部対抗「空間遊具コンテスト」を行うとの知らせを受けました。彼は今回の実行委員会副委員長でこのお祭りイベント部会の会長を任せられ、彼の発案でこの企画は生まれました。内容は次のとおりです。「建築士会々員の技術を生かし、普段の設計や建築活動で育んだ能力を社会にアピールすると共に製作作業による支部会員同士の結束の一助になることを目的とする。各支部で创意工夫を凝らした幼児向けの空間遊具(視覚的、または感覚的に空間を体现できる楽しく遊べる装置)を製作し、イベント会場で展示し、子供たちに遊んでもらうとともに投票してもらい、審査員の審査と併せて優秀作を決定し表彰する。希望があれば幼稚園、保育園等に作品は寄付する」

そして今年の5月24日、7支部8作品が展示されました。すべての遊具は木で作られ、その努力の結晶は甲乙付けがたいアイデアいっぱいのものばかりでした。なかでも板野支部の「迷い空間」は最高の榮誉・知事賞に輝きました。希望する幼稚園や小学校が殺到し抽選でそれぞれ引き取られていきました。

幼稚園の先生方や父兄との楽しいお付き合いの中から生まれた小さなおうち、林さんを始め士会の仲間らが大きく展開させてくれました。ラウンドハウスの完成と共に定年退職された園長の住友先生、転任された主任の森先生には何度もありがとうを言っても足りない気持ちです。設計者として地域社会に参加できることは、こんな身近なことから始まるのだと改めて知られた出来事でした。

とみた・しんじ／富田建築設計室主宰



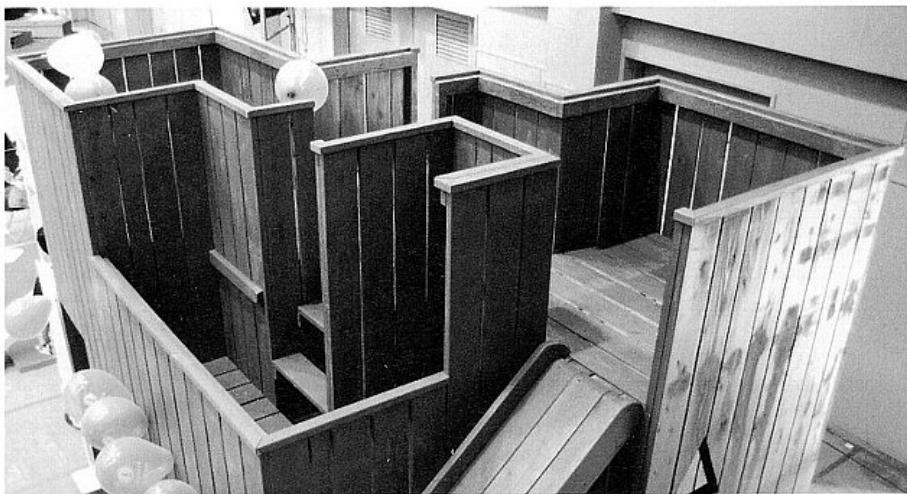
△ラウンドハウス配置図 1/125

徳島『空間遊具コンテスト』出展作品より

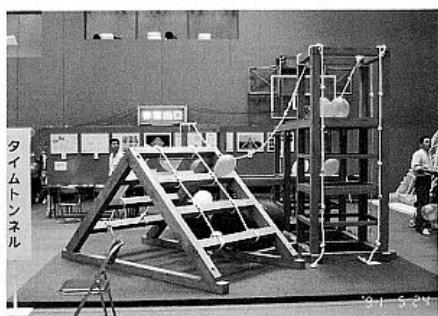
写真=富田真二、林茂樹提供



▲ボクのパワーは∞(小松島・勝浦支部)



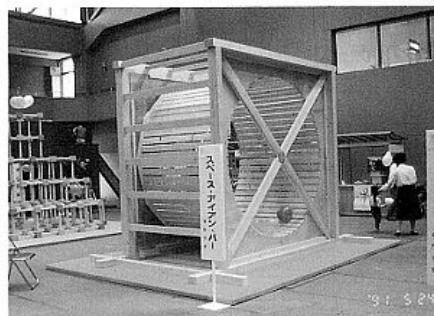
▲迷い空間(板野支部)



▲タイムトンネル(鳴門支部)



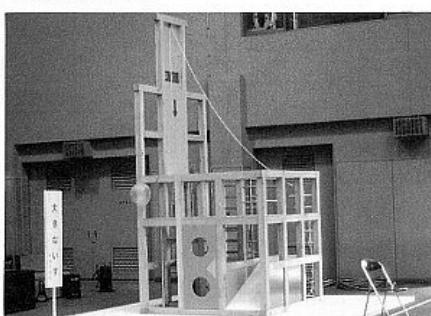
▲Being(徳島支部1)



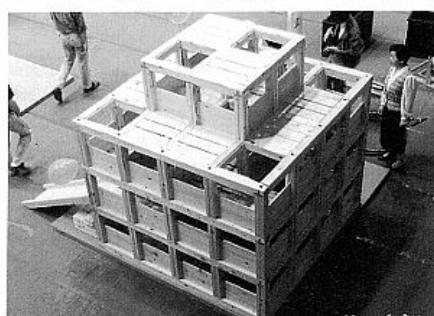
▲スペース・アイアン・バー(海部支部)



▲森林(サンキー)ペリーマッチBox(川島支部)



▲大きないす(徳島支部2)



▲立体迷路(阿南・那賀支部)

ラウンドハウスへの思い

南東 文江

園庭の真ん中にある大きな土山に登り、空を見上げると、澄みきった青空に引き込まれそうな、なんともいえないよい気持ちになります。川内南幼稚園は、広々とした園庭や、恵まれた自然環境に囲まれた幼稚園です。そんな本園に、この夏すばらしい遊具が加わりました。名前をラウンドハウス(循環する家)と言います。この遊具は、趣を異にしている三ヵ所の出入り口を持ち、中に入るとスロープ通路は知らず知らずのうちに最上部まで導く魔法の回廊となり、中央吹き抜けのハシゴやすべり棒で地上に逆戻りするようになっています。そして、また入り口へと、子どもたちを回遊ゲームに誘う、まさに循環する家です。

このラウンドハウスは、前PTA会長の富田真二さんが設計し、9月に完成したものです。全長さん

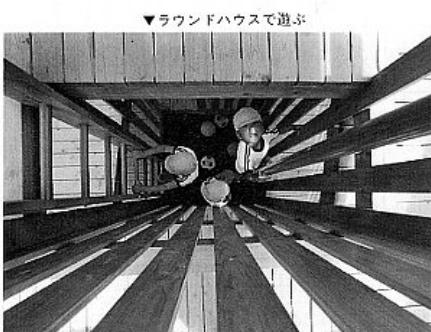
はこのラウンドハウスを造るにあたって『迷宮的で楽しい遊具のような家を造りたい。子どもたちの感性に刺激を与えるような、小さくても大きな宇宙を造りたい。そして、このハウスが幼い子どもたちの果てしない夢と未知への創造力のささやかな手助けになることを願っています』と、このラウンドハウスへの思いを語ってくれました。

土山から滑り降りると、そこに大きな口をあけ、子どもたちを夢の世界へ連れて行ってくれます。あ

るときは宇宙船となり「発進10秒前、まだ人は早く乗ってください。もうすぐ出発です」「あ、怪獣発見、ミサイル発射用意」など、子どもたちはイメージをどんどん広げ、思いを日々に遊びに没頭していきます。またあるときは、冒険の島となり、ラウンドハウスによじ登り、何度も失敗を繰り返しながら頂上の赤い屋根めぐらして全力を出しきって挑戦しています。登りきったときの子どもの顔は「自分は何だってできるんだ」という自信に満ち溢れ、どんどん冒険を楽しんでいきます。

今では、本園を訪れる子どもたちは土山に駆け登り、一番にラウンドハウスの入り口へと走って行きます。そんな子どもたちの心を引きつける不思議な力をもっているラウンドハウス、世界にたった一つ本園にしかない遊具ラウンドハウス、夢の城ラウンドハウス、これからも本園のシンボルとして大切に大切にしたいと思います。

なんとう・ふみえ／川内南幼稚園教諭



56頁下写真=西田茂雄

(「徳島市幼児連だより」第10号より転載)

ラウンドハウス

地元実業団
草野「田中商店」



